

## どんぐり油

成平なりひら 一平太いちへいた

「こう太にはな、もう帰っておいで」

暑かった夏も終わろうかという日の夕暮れ、重兵衛長屋の裏手の小高い丘に建立された小さな神社は子供たちの格好の遊び場となっていた。大きくなくぬぎやらの木の隙間から見上げる空は紅く染まり一日を終わろうとしている。

次男のこう太と末娘のはなは宮大工のせん太と女房のきくの間に産まれた。六歳と五歳の幼児でありまだまだ手が掛かる年ごろだ。少し歳の離れた長男の太郎たろう吉は十四歳をこの夏に迎えた。したがって、せん太が米問屋の下働きをしていたきくと所帯を持ち、重兵衛長屋で生活を始めて十五年が過ぎたことになる。

重兵衛長屋にはせん太親子の他に十三世帯が生活していた。比較的たな賃が安いせいもあって空き家もなく、井戸の周りではおかみさんたちの賑やかな笑い声が毎日のように聞こえていた。

「おかあちゃん、おなかすいた」

砂埃にまみれたこう太がたらいに足を入れ荒縄の切

れ端を丸め、一日の足の汚れを洗い落としている。もつともはなど二人、たらいの中で遊んでいるといつても過言ではない。それを眺めるきくの顔も緩んでいる。いつの間にか長屋の子供たちが集まり水の掛け合いが始まった。

「おお、やってるな」

「太郎吉兄ちゃんおかえり」

太郎吉はシジミがどつさりに入った竹かごを井戸のそばに下ろすと子供たちが中を覗き込んだ。

「今日も大漁だね」

「こう太、たらいをこっちに持ってきてくれ。はなは長屋のおばちゃんたちにお椀を持ってくるように声を掛けて」

たらいの中に籠の中のシジミを移し、軽く水洗いを済ませ一晩かけて泥吐けをさせれば商品と化す。太郎吉はこれを持って朝早くから得意先を回って朝餉の味噌汁の具としてわずかではあっても金に換えていた。

長屋のかみさんたちが次々に椀を太郎吉の前に差し出す。

「いつも悪いね」

「いいさ、お世話になってるんだから」

毎日のようにせん太郎は金を受け取ることなく長屋

のおかみさんたちに分けていた。

太郎吉のシジミをただで授かる者がもう一人いた。家督を息子に譲り隠居生活を楽しんでいる鴻山喜左衛門だった。

「おはようございます。ご隠居さんもう起きていらっしやいますか？」

翌、朝早くからしじみを売り歩き、最後に寄る武家屋敷の裏門の扉を開けるなり、太郎吉が大きな声を勝手口に投げかける。

「おお、太郎吉。いつも悪いな」

年老いた女中が台所から小さなざるを持って出てくるのと同時に喜左衛門が庭先から声を掛けてくる。

寝所を背中に縁側に腰を落とす喜左衛門は朝早くから火縄銃の手入れに余念がない。

「ご隠居さん、おいらにも鉄砲を触らせてよ」

「だめだ、だめだ。それは叶わん。これは当家に伝わる家宝ゆえ、いくら太郎吉とて触れさせるわけにはいかん」

縁側には紫の大きな袱紗が広げられ、解体された火縄銃の小さな細工物をほんのり油の染みた布で一つ一つ丁寧に喜左衛門が磨いては順に並べていた。

「ご隠居さん、そのぐるぐるとへびがとぐるを巻いた

ようになってるの？」

太郎吉の目が今まさに取り外されかけている細工物に釘づけされたかのように一点をみつめている。その顔は子供の顔ではなかった。これまで突き崩すことのできなかった厚く大きな壁に穴を空ける算段がひらめきかかっていた。

「これか、これは銃尾栓という。鉄砲を放ったあとに筒の中を掃除するために取り外すことができるようになってる」

「そのへびがとぐるを巻いたような溝は？」

「これは、火薬が爆発しても抜けないようにするための細工じや。筒の方にも同じように溝が掘ってある」

「筒の方を見せてよ」

「それはいいが・・・。手は出すな、覗くだけぞ」

太郎吉の視線は針の孔を通しているかのように銃尾栓に切り込まれた溝と山に沿って流れ、頭の中では銃尾に回し込まれては抜かれる栓の動きが繰り返されていった。

「太郎吉、もういいだろう。わしの腕が悲鳴をあげておる」

火縄銃の重さに耐えきれず喜左衛門の顔に汗がにじみ歪んでいる。

「隠居さんもういいよ。ありがとう」

喜左衛門は安堵の大きなため息とともに火縄銃を袱紗の上に置いた。

「どうした太郎吉。何がそんなに・・・」

「黙ってー。いま、ひらめきかけているんだから」

太郎吉の顔は真剣そのものだった。腕を組み眉間に微かにしわを寄せ、うつむき加減のまま身じろぎもしない。

「隠居さん、ありがとう」

神でも降りてきたのか太郎吉の目が大きく開き天を仰ぐ。両腕のこぶしは胸の前で固く握りしめられ力強く一度だけ上下に振られた。と、同時に喜左衛門に礼を述べ、そのまま屋敷の外へと飛び出した。

「おい、太郎吉。籠、籠」

もはや太郎吉にはしじみを持ってきたことなど頭にはない。喜左衛門の呼びかけに耳を貸すこともなく走り去っていった。そして、その足で浄明光院へと駆けこんだ。

「庵主さまー、庵主さまー」

太郎吉の息使いが激しい。心臓の発する音が境内の空気さえも揺らすかのように思える。

「太郎吉さんではありませんか。朝早くから大きな声

でどうしました？」

まだ十五歳ににも満たない太郎吉を浄明光院の庵主である浄明光院静蓮は敬意の念を抱いてさんづけで呼んでいた。

浄明光院はそれなりに格式の高い尼寺だった。阿弥陀像が祀られた本堂以外にも三棟の庫裏が設けられ、庵主の静蓮と五人の尼僧が暮らす母屋の他に一昨年、昨年と続いた大火で孤児となった子供たち三十人ほどが暮らす棟がっながっていた。

「庵主さま、おはようございます」

太郎吉は静蓮を見つけるやいなや駆け寄った。

「おはようございます。どうしました朝早くから」

「庵主さま、子供たちの暮らし向きを良くするための案が見つかりそうです」

「暮らし向きを？」

「そうです。暮らし向きです。庵主さま、おしゃつていたじゃないですか」

江戸にいる孤児たちはここに暮らす者だけではなかった。生きて行くために悪の道へと進まざるえない者や大人たちの犠牲となる子供もいた。とりわけ女兒は悲惨な道をたどる確率が高く、静蓮はこうした孤児を一人でも多く集め、独り立ちできるまでの暮らしを守

つてやりたいと考えていた。しかしそれには安定した多くの浄財を必要とした。浄明光院の経済は大家や大店からの寄進によつてまかなわれていた。敷地には二反ほどの畑もあり静蓮をはじめとした尼僧や子供たちによつて日々の暮らしに必要な野菜を作つていた。百姓からの寄進も多く、口にするものには不自由はないものの、浄財そのものはそれほど多くはなかった。十歳を過ぎた子供たちが毎日稼いでくるしじみの売り上げは貴重な浄財だった。

「あつ、太郎吉兄ちゃん。今日もたくさん売れたよ」

しじみ売りから帰つてきた子供たちが小銭で膨らんだ巾着を嬉しそうに差し出した。古着をほどいて作り変えた巾着の紐が「どうだ」といわんばかりに重さに耐えているのがわかる。太郎吉は巾着を手のひらに載せて重さを確認するかのように上下に動かした。

「本当だ、これなら三十文。いや、三十五文かな」

太郎吉は子供たちにしじみの獲り方や泥の抜き方を教え、売り先をも紹介していた。

もともとは喜左衛門に頼まれて浄明光院の浄財の手助けとして年長の子供たちにしじみ売りを仕込み、武家屋敷やその配下の武家長屋を中心に三日に一度の割で決めて廻らせた。町屋や長屋を流し歩くよりはは

るかに効率もよく、なによりも木戸をくぐり勝手口に直接声を掛けられることで無駄に歩くこともなく四升ほどのしじみが椀一杯、一文に替わつていった。二人が一組となつて三方に別れての小商いとなつていた。

これらはすべて喜左衛門の口利きがあつてのことだった。しじみがひと月半ほどで一両の浄財になつた。そしてその半分が食材を除く子供たちの着物や日々のこまごまとした物の購入費に充てられ、半分は子供たちが巣立つて行くその日のための支度金として蓄えられた。静蓮は、子供たちが差し出した三個の金着を受け取ると額に押し当てた。

「さあ、みなさん朝餉にしましょう。太郎吉さんも一緒にどうですか？」

「ありがとうございます。それよりもお話が・・・」  
「そうでした、そうでした。暮らし向きがよくなるかもしれないとか？ でも、まずはお腹を満たすことが先。さあ、こちらへ」

静蓮は広い敷地の中に新たに建屋を作り、江戸に散らばつてゐる孤児たちを一人でも多く住ませ将来に備えてやりたいと口にしてゐた。しかしそれには多くの浄財が必要であり、今ここで暮らしている孤児たちだけで精一杯の現実があつた。朝餉を済ませた太郎吉

は静蓮と向かい会い一呼吸おいてから口を開いた。まだ、十五歳にも満たない太郎吉が大人びて見えた瞬間だった。

「庵主さま、この境内で油を搾りましょう」

「油を？」

静蓮は太郎吉の口から出た言葉にあっけにとられ、瞬きが止まるかのような思いだった。

「そうです、油です。油は高値で売れます。しじみを買って下さるお武家さんは良いお得意さんになってくれるとおもいます。菜種油なら一升四百文、鰯油なら二百文、安くても鰯油は魚臭く煤も多く出ます」

静蓮は「じゃあ、太郎吉さんは何から油を搾るの？」と口を挟みたい心境にかられたが呑み込んだ。

「どんぐりから油を搾るのです」

静蓮が呑み込んだ言葉をすくい上げたかのように太郎吉が口にした。

「どんぐり？」

啞然としたかのように静蓮の口が開いた。

「そうです。どんぐりから油を搾るのです」

おなじ言葉を繰り返す太郎吉の顔には自信があふれているのが見てとれた。

油搾りは大変な重労働であり希少価値の高いもので

あることを静蓮は知っていた。大勢の男がふんどし一つになって搾り出した油が江戸のまちを明るくし、太陽が沈むのと同時に床に入る生活を変えた。それは静蓮も同じだったが、高値の油はそれほど贅沢に使うことなど許されず、少しでも安ければと鰯油で我慢するしかないのが実情ではあった。しかし鰯油は小さな子供にはぜんそくの原因にもなると敬遠もされた。

太郎吉のしじみを買ってくれる武家の中に沼津藩下屋敷の武家長屋があり、その下働きをしていた女中が伊豆大島の出だった。その女中との世間話の中に大島の椿油の話があった。以来、太郎吉は油は菜種だけではなく色々なものから搾ることができるのではないかと考え、茶の実、柿の種、などで試してみたものの油を取り出すほど大量に集めることの困難さを覚っていた。そして行き着いたのがどんぐりだった。女中から聞いた通り、乾燥させて砕き、炒ってからさらに細かくしてさらに包み込み蒸した。何度か試みたものうまく搾りきることができなかった。力がたりないのだ。でも油らしきものがないじみ出ることに手ごたえを感じていた。「押し切る力さえもつと大きくできればきつとうまくいくに違いない。その方法さえわかれば・・・。」

そんな時に喜左衛門が手にしていた銃尾栓を目にしたのだった。火薬の爆発にも耐える力を押し込むことができればどんぐりから油を搾ることができる。大人の力を必要とすることなく子供の力を大きく変える工夫さえあれば。ましてやどんぐりはどこにでもある。子供たちの手を借りれば一俵でも、いや十俵、それ以上だって。必ずや、どんぐりが小判に替わると太郎吉は確信していた。

「お話はわかりました。でも、どうやって搾り出すほどの大きな力を子供たちが造りだせるのが・・・」

「大丈夫です。おいらに任せてください。それよりこれから少しづつ色々なものを境内に持ち込みますがよろしいでしょうか？ それと子供たちにさっそくどんぐり集めさせたいのですが・・・」

「わかりました。太郎吉さんを信じましょう」

「ありがとうございます。油を売って家を建てて江戸中の身よりのない子供たちを呼び集めましょう」

太郎吉の顔は自信に満ち、声は浄明光院冥の境内を跳ね回っているかのように見えた。

「庵主さま。大の男が何人もかかって搾り出す油を子供たちだけで搾るなんてできるんでしょうか？ それもどんぐりでなどと・・・」

一緒に話を聞いていた尼僧たちが太郎吉の話はとも信じられないとばかり口にした。そして、太郎吉を信じ切っている静蓮を心配するかのように入見つけた。

「かあちゃん、ただいま」

「お帰り太郎吉。朝ごはんは？」

「いい、今日は庵主さまにごちそうになった」

「そうかい。庵主さまはお元氣そうだったかい？」

「ああ。かあちゃんこれ、今日のあがり。四十三文」

「ありがとうございます」

「太郎吉にいちやん、遊ぼうよ」

太郎吉の帰るのを待っていたかのようにこう太とはなが腕に絡み付いてきた。

「ねえ、とうちやんいつものお屋敷？」

太郎吉はこう太と花の手を振りほどきながら急かすかのように問いかけた。

「ああそうだよ。お目付けの土岐さま本宅の改築」

「わかった。ごめんな、兄ちゃんちよつとご用があるんだ」

返事をするやいなや太郎吉はこう太とはなを置いて駆けだしていった。

太郎吉の父親、せん太は十五歳の春、宮大工の棟梁

の元に弟子に入り二十数年になる。呑み込みも早く手先の器用なせん太は、その腕を見込まれ今では小頭こがしらを務めるようになっていた。そんなこともあって親子五人の生活は裕福とまではいかないものの食に困るようなことはなかった。それでも太郎吉が毎日しじみを売って稼いでくる四十文そこそこの金は大きな存在意義があった。女房のきくも針仕事をして幾ばくかの手間賃を稼ぎ出していた。それらはせん太がいつかは棟梁となるための資金にと貯えられていた。棟梁になるためにはそれなりの腕と人格が必要なのは当然ではあったが寄合に納める三十両の大金がなければ棟梁株を手に入れることはできなかった。せん太にとってこの三十両はとてつもなく大きな金きん子すではあったが、今の棟梁が引退したら後を継ぎたいとコツコツと貯めていた。「とうちゃん」

柱にのみで細工をしているせん太の大きな背中太郎吉が勢いよく呼びかける。体つきはまだ幼さを残してはいるが大人びた響きのある声にせん太がふりむいた。顔からはすでに汗が噴き出している。

「おお、太郎吉。どうした？」

せん太は手ぬぐいで汗を拭きながらノミと錘を置き笑顔を見せた。

「とうちゃん、材木の切れ端を貰っていい？」

「ああ、いいよ。その中から持つて行け」

せん太が指さした現場の隅に材木の切れ端が無造作に置かれていた。太郎吉はその中から両掌で握れるくらい丸太の切れ端と垂木の切れ端を選び長めの荒縄でしばって小脇にかかえた。

「太郎吉、すこしこの現場を見て行け。お前もそろそろ職を手につける年ごろだ。宮大工はどうだ？」

駆けだそうとする太郎吉の背中に声を投げかけるせん太の顔つきは真剣だった。父親として子供の将来をおもんばかっていた。いつかは棟梁に思うと同時に子供に跡を継いで欲しいとの願望がこもつてもいた。いずれは真剣に太郎吉と向き合つて話さなければとも考えていた。それが今なのかもしれない。

十二、三歳を過ぎれば家々の事情にもよるであろうが子供たちは食を手につけるために職人の弟子になりたり店に奉公に出たりしていた。

「とうちゃん。これだけ貰っていくよ」

せん太の願望は太郎吉の背中には届いていないようだ。太郎吉は振り向きざまに笑顔を見せてそのまま小走りで裏木戸へと消えた。

長屋へと帰った太郎吉はすぐさま、釜戸から消し炭

を両手ですくい、小槌で碎きながら粉にすると鉢に入  
れ少しづつ水を注いで墨汁を造り荒縄を鉢の中を端か  
らくぐらせ丸太に隙間なく巻き付けた。荒縄の墨汁が  
丸太に付くと壁に立てかけた。墨汁が垂れはするもの  
の荒縄の跡ははつきりと見て取れた。

三寸ほどの垂木を三本並べその中程に丸太より一回  
り小さく円を描くと真ん中の垂木は必要はないとほか  
りに無造作に脇に置いた。両端の垂木には三分の一づ  
つの円が描かれている。太郎吉は父親が使わなくなっ  
た道具箱の中から適当なノミを取り出して線にそって  
彫り始めた。

小さな土間にむしろを敷き、腰をおろしての作業は  
止まることなく一刻半ほどつづいた。喜左衛門に見せ  
てもらった銃尾栓が頭の中にくつきりと焼き付いてい  
る。あの蛇がとぐろを巻いたような山と谷の彫り物を  
丸太と垂木に同じように彫るために必要な荒縄の墨の  
跡も浄明光院までの道のりの間に思いついていた。何  
をどうすれば子供の力でも油を搾り出すことができる  
のか、それも非力な子供の力で。すべて太郎吉の思い  
つきだった。太郎吉の頭の中には既に油が壺の中に滴  
り落ちていた。

丸太は、荒縄の痕を掘ることで山を造り、垂木はく

りぬいた内側にそって付いた縄の痕を掘ることで谷を  
造った。丸太の山は垂木の谷を滑るかのようになりな  
がら奥へと進み五寸ほど頭を出した。何度も何度も山  
と谷とのすべり合わせ具合を調整しての結果だった。

「できた。これならきつと油を搾ることができる」

満足げな太郎吉の顔に光る汗。子供ながらも自信に  
満ちた男の片鱗を放っていた。太郎吉は最後に丸太の  
上の方に丸く穴を空け作業を終えると同時に竹かごと  
竹みのをもって家を出た。東の空はすでに紅くなりか  
けている。

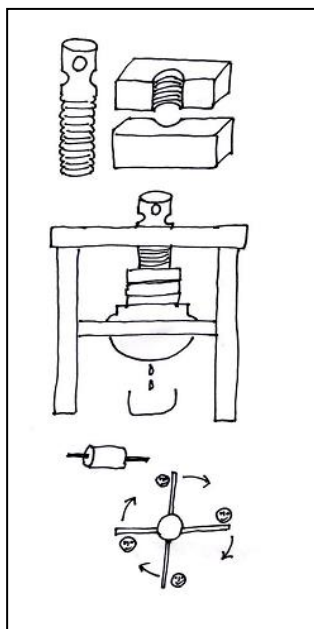
「おかあちゃん、太郎吉にいちゃんまたでかけたの？」

「ほんとうだね。太郎吉兄ちゃんは忙しいね。こんど  
はしじみとりかな」

しじみの鮮度を保つのは難しい。しじみを売り歩く  
多くの者たちはその日の朝早くに川に行き、しじみを  
獲ってそのまま売り歩く。鮮度は高いが泥臭さが少し  
残ることになる。太郎吉は、前の晩に獲って井戸の水  
に一晚さらすことで泥吐きをさせる。真夜中に一度水  
を新しい物に替えることで鮮度を落とさないように工  
夫をした。その結果、太郎吉のしじみは他のしじみ売  
りと同じ値段にもかかわらず泥の匂いがしないと評判  
が高かった。



それから五日ほどして、太郎吉は朝餉を掛けこむように済ませると細工物を抱えて浄明光院に走った。境内に付くと同時に、前から準備をしていた垂木などの切れ端を適当な長さに切り、組み立てて鉄なべを中央に据えた。鍋の上には太郎吉が細工をした木製の銃尾栓が突き出るように組まれた。



朝の四ツになると喜左衛門が浄明光院へとやってきた。七十歳近いその躰はさすがに武士、顔は前を見据え背筋はスート伸び、足運びもどことなく町人のそれとは違っていた。それでもさすがに腰に差した二本が重いのである。しきりに気にするかのようには手ですわり心地を確かめるかのような仕草を繰り返していた。

喜左衛門が浄明光院にやってきたのは、今朝いつものようにしじみを届けに来た太郎吉に言われてのことだった。暇を持って余すほどの隠居の身とはいえ、しじみ売りの子供に呼び出しを受けてのことであった。町人の子供が武士に呼び出しを掛けるなどあり得ないことではあったが、二人の間には身分の違いを気にするようすなどはない。

喜左衛門と太郎吉が出会って一年になる。喜左衛門の屋敷の勝手場で下働きの女が二人、言い争いをしていた。

「おはようございます。しじみはいりませんか？」

三日おきに太郎吉はしじみを売りに顔を出していた。

「この漬物石の大きさは二升ほどある」

「いや、絶対でない」

大きな声が、台所の小物を揺らすかのようなだ。

どうしてこうなったのかはわからないが、どちらも一歩も譲る気はない。喧嘩をしているでもないが、顔は高揚し、眉を吊り上げ口をとがらせている。二人とも負けてはいない。

「朝から騒々しい。何事だ」

喜左衛門が大きな声を聞きつけて台所に顔を出した。

「お殿さま、もうしわけありません」

使用人の女は、さも申し訳なさそうに前掛けで手もみをしながら頭を下げた。

「何をもておった」

喜左衛門が騒ぎのもとをただすかのように年長の女に問いかけた。

「はい、あの漬物石の大きさがどれほどあるかと……」

年長の女が、申し訳なさそうに漬物石を指さした。

「くだらん。石の大きさをどうでもよい。重ければそれで役にたっているのだから」

喜左衛門にも石の大きさなど計れる手段は見つからなかった。くだらんと一蹴することでの場を収める他に手だてがなかった。

「お殿さま、石の大きさなら量ることができます」

差し出がましいことではあったが、太郎吉の口が勝手に開いていた。

「なに、このいびつな漬物石の大きさを子供のお前が量れるというのか？」

「はい。簡単なことです」

太郎吉は、近くにあった桶に水を張り漬物石を沈めた。

「この桶の中の水の高さはここにあります」

太郎吉は、水面の位置に釜戸の炭で印を付けると静

かに漬物石を桶から取り出した。

「この炭の位置まで、一升枡と一合枡を使って水を入れてだけ入ったかが石の大きさです」

太郎吉の顔は大人びたまなざしを放っていた。このことに感心した喜左衛門は、太郎吉に屋敷への出入り勝手を許しただけではなく、顔の利く多くの武家屋敷への出入りが容易に叶うように口利きをしてくれたのだった。以来、喜左衛門を「ご隠居さま」と呼ぶようになっていた。

今回も太郎吉の真剣なまなざしに何かを見取つてのことだった。

「ご隠居さま、ご足労いただいて申し訳ありません」

準備はすべて整った。とばかりに太郎吉は落ち着きはらっている。誇らしげにさえ見える太郎吉の額にわずかながら汗が光る。

「いやなに、造作はない。それより太郎吉、何を見せてくれる」

すでに喜左衛門の目は、どんぐりらしき木の実や木材が組まれた中央の鉄なべを見据えていた。わざわざ呼び出すほどのことが繰り返られるに違いない。太郎吉がこの期待を裏切ることはないと喜左衛門は顔をほころばせながらの浄光明院までの道のりだった。

「今ここでこのどんぐりから油を搾ります」

喜左衛門も、庵主も尼僧たちも身じろぐことなく太郎吉の話の聞き、動作を見逃すまいと目がまえるかのようにも見える。

目の前には一抱えほどの竹ざるが三枚置かれている。どんぐりの実が盛られたざる。殻が取り除かれたどんぐりのざる。今ひとつのざるには白いさらしが広げて置かれていた。その横には、ござの上に平らな石が置かれている。

「このどんぐりは、くぬぎ、ならなど、この境内にも、どこの雑木林や近くの山にもあるものです」

太郎吉の口上が始まった。そばには長兄の孤児、こう助と三吉と他に二人の子供が控えていた。

「どんぐりは先ずそのまま天日に干してから殻を取り除きます。次に白い実を木槌で藁を叩くかのごとく打つて碎きます」

太郎吉の合図でこう助が二つ目のざるから白くなつたどんぐりを両掌ですくつた。そして、平らな石の上に置くと木槌で碎いてはさらしが広げられたざるに移した。それほど力を入れなくてもどんぐりは容易に碎けた。

「次にこの碎けて細かくなつたどんぐりを炒ります」

俺の出番とばかりに火にかけられた鉄なべの中に碎けたどんぐりを入れ、三吉が焦げ付かないようにしやもじでせわしなくかきまわし、太郎吉の目を見ながらころあいを計り再びさらしの上にあけた。

「完全に水分が抜けたところでこれをさらに細かく碎き、粉にします」

再びこう助が平らな石の上にどんぐりを置き、丸太の両端に柄の付いた道具に体重をかけて幾度か転がすと粉になった。

「次にこれをさらしに包み蒸籠で蒸します。蒸しあがつたらあの銃尾栓を見て思いついた搾り道具の釜に入れます」

五升ほどのどんぐりが二升ほどの粉へと姿を変え蒸し器に入れられ、さらしに包まれたまま最後の搾り道具の釜へと移された。さらしの上には薄く平らな石が乗せられた。銃尾栓を横した丸太が組まれた垂木の間から頭をのぞかせると石との間に幾つかの柱の切れ端が入れ込まれた。太郎吉はさらに丸太を回し入れ、止まった所で丸太にくりぬかれた穴に二間はあろうかという太い竹を差し込んだ。さらに互い違いにもう一本の竹を穴の中に差し込み四人の子供たちが道具を中心に竹の端に体重を掛けながら丸太を回し入れた。

丸太に刻まれた山がきしむ音を境内に放ちながら垂木の谷に沿って難なく押し入って行く。それに伴って油が搾られ浮きあがってくる。あらかじめ釜に空けられた穴から油が滴り落ち受け皿の中に垂れた。

「おお、確かに油が・・・」

喜左衛門が感嘆の声を上げた。

受け壺の中には黄色身をおびた油が光っていた。その輝きは浄光明院の庵主、静蓮の孤児たちの将来を確かなものへと導く阿弥陀の放つ光にも似たもののように尼僧たちには思えた。

「太郎吉、よくぞでかした。しかし、この量では商いするには少なくないか？」

喜左衛門の表情は厳しいものに変わっていった。種油が四百文、鰯油が二百文、どんぐり油を三百文で商つても一刻かけてこれでは大きな商いには結び付くこともなく、孤児を集めたいという静蓮の願いには遠い。「もちろんわかっています。この道具はおいらが造つたもので、父ちゃんにもっとでかいのを造ってもらおうと思つています」

太郎吉の目は自信にあふれていた。どんぐりが集められる季節にも限りがある。せいぜい二か月といったところだ。一日、一俵か二表ぐらいであろう。浄光明

院の裏山には檜の木や樫の木、くぬぎだつて。近くの雑木林にだつていくらでもある。子供たちを使って集めれば百俵ぐらいにはなる。どんぐりから搾り取る油は十五両ほどに替わる。それも元手はかからない。売り先は、しじみと同じ武家屋敷を回ればいい。菜種あぶらより百文も安ければ売れないわけがない。薪も山から調達すればいい。殻だつて燃せばいい。煮詰めるわけでもなく多くの薪は必要としない。灰も搾りかすも畑の肥料となる。

太郎吉は思い描いているどんぐり油について喜左衛門や静蓮に語った。

「よくわかった。それにしてもどんぐりから油が取れるとは驚いた」

「本当に、驚きですね。さつそく作業小屋を造らねばなりませんね」

喜左衛門と静蓮の聲がこころなしか弾んでいる。どんぐりの実から搾られた油が江戸の孤児たちを救うことに。静蓮の願いが太郎吉によって叶えることができる。

「静蓮殿、太郎吉に負けてはおられん。わしもお手伝いさせてもらいたい。作業小屋の手配は私がさせてもらいます」

それから十日ほどが過ぎて小屋ができ、その翌日の朝にはせん太が細工をした大きな丸太の銃尾栓が組み込まれた。朝早くからどんぐりを砕き、蒸された大きなさらしの包みを鍋一杯に入れ、太い竹を丸太に通し四人の子供が体重をかけ地面を強く蹴った。丸太はギギギーと音を響かせながら回り始め、なべの中に置かれた平らな石を間に噛ませた木材の切れ端が鍋の底へと押し入った。

「すげーじゃねえか。確かに油が……。本当にこれをうちの太郎吉が……。」

せん太は腕を組み、我が息子ながらたいしたものだと驚きの声をあげた。笑みを含んだ顔は何度も何度もうなずき、受け壺の中の油の輝きに心を奪われているかのように見える。と同時に、太郎吉は宮大工にはならないだろうと思った。

「せん太殿。いやあ、たいしたものだ。改めて驚いておる。せがれ殿のすごさに。さぞや鼻が高いであろう」「ほんとうに。これで多くの孤児たちが救われます」

改めて喜左衛門と静蓮は、太郎吉の偉業ともいえるどんぐり油の放つ輝きに歓ぶ声とともに感銘の思いをせん太に伝えた。

翌日から子供たちが拾い集めたどんぐりは境内に広

げられたむしろの上で天日に干され、三日後には殻むきが始まった。毎日、拾い集められた量ごとのどんぐりが四日後には油に変わり、二升壺に移しては子供たちが武家屋敷を回った。太郎吉のもくろみ通りどんぐり油はその質と安さが評判となり売れ残ることもなく毎日が過ぎた。

「庵主さま、もう今年のどんぐりの季節は終わりました。このあたりでは拾いつくしました。また来年がんばりましょう」

予想通り、この季節でどんぐりから搾った油は十六両ほどになった。どんぐりを拾い集めるのと同時に進めていた境内の隅に建てられた子供たちの家も完成している。

「そうですね。太郎吉さん、本当にありがとうございます。そしてご苦労様でした。これで寒くなる前に子供たちを招き入れることができます」

静蓮は心の底から手を合わせ臉に浮かぶ阿弥陀如来に感謝の念を抱くと同時に太郎吉に頭を下げた。

「バタバタツツ」

境内でどんぐりの欠片を啄んでいた鳩や小鳥たちが本堂の屋根に逃げるかのようにいっせいに羽音を立てた。

「浄明光院靜蓮殿でござるか？」

大勢の小役人を引き連れて寺社奉行与力が靜蓮の前に立ちはだかった。

「靜蓮ですが大勢で何事ですか？」

靜蓮の顔は不安を隠すかのように落ち着きはらつてはいたが、太郎吉の顔は今にもひきつらんとしているかのように見える。

「お前が太郎吉か？」

役人の名ざしに、太郎吉は靜蓮の後ろへと回つて身をすくめるかのような仕草を見せた。騒ぎを聞きつけた尼僧たちが靜蓮と役人の間に割つて入り加勢するかのごとく身構えた。しかし、寺社奉行に逆らうこともできず、靜蓮と太郎吉は縄を打たれることこそないもののそのまま連れていかれた。油を搾る道具の全てが大八車に乗せられその後ろに付いた。

油は貴重で値も高い。しじみとは違い、誰であろうが油の製造も商いも御上の鑑札がなければできなかった。もつとも鰯油は例外的な扱いを受けていた。靜蓮も知つてはいたが原料が菜種ではなく落ちていりどんぐりであることから問題はないものと思つていた。ましてや一年を通して行かうわけでもなく二か月ほどの作業でもあり、おとがめを受けるほどのこととは考えて

もいなかった。

知らせを聞いた喜左衛門は、すぐさま幾人かの目付に聞きまわつた。その結果、どんぐり油の評判に恐れをなした問屋の元締めが目付役の一人に裏から手を回したのではないかと口にする目付の同僚にいきあたつた。そもそも御上の定書きさだめかには菜種油としか書かれておらず、どんぐり油が法度に触れるものかどうかも怪しいものではあつたが、目付役は寺社奉行に手を回し「尼寺が油の商いなどけしからん」とばかりに難くせを付けさせたものだつた。

幸いにして、喜左衛門の口利きで靜蓮も太郎吉も翌日には放免となつたものの道具の一切が没収された。

「くっそう。せつかく庵主さまが江戸の孤児たちを救つてやりたいとお考えになつたのに、目付のやろう」  
太郎吉の顔は憤慨しきつていた。

「太郎吉さんそんなふうにはなりません」

「わからんでもないが、せつかく放免になつたのだ。ここは辛抱するしかない」

靜蓮も喜左衛門も腹立たしさを感ぜずにはいられたかつたが、相手が目付ではどうすることもできなかった。

「だけれど、孤児たちを・・・」

「心配はいりません。尼僧たちにはこれまで通り孤児をここにと申し付けてあります。暮らし向きはなんとかなるでしょう」

「でも、庵主さま。しじみ売りだけでは多くの孤児たちを満腹にはさせられません」

「大丈夫だよ、太郎吉兄ちゃん。おれたちもつとしじみをたくさん獲って稼ぐよ。それにみんなが少しずつ我慢すれば助かる仲間も多くなるし」

浄明光院で暮らす者は皆、自分のことだけではなく多くの孤児たちを思いやりながら暮らしている。それだけに太郎吉は油問屋の元締めや目付が許せなかった。どうかして仕返しをしてやりたいとの思いが「今にみている」と、小さなつぶやきとなって何度も口に出しながら重兵衛長屋へと帰った。

「心配したよ、太郎吉」

長屋家に帰った太郎吉を住人たちが出迎えた。母親のきくは前掛けで目頭を押さえながら太郎吉を抱き寄せた。

「それにしても、あの油問屋のごうつく爺。御上に手を回しては御店を大きくしてきたって評判の悪だよ」

「わたしも聞いたことがあるよその話。お目付けだって寺社奉行さまだって光る小判には弱いだよ」

「きつと、太郎吉ちゃんが造ったあの油を搾る道具もあのごうつくに払い下げになるに決まってる」

長屋のおかみさんたちが矢継ぎ早に口にする。

「太郎吉、よかった。よかった。ご隠居さまには感謝してもきれいな」

父親のせん太の顔も涙でぐしゃぐしゃになっている。「そうだよ、あんた。明日さっそくお礼に何わなくちゃね。なに持って行くかね」

落ち着きを取り戻したかのようにきくがせん太に視線を投げかける。

「いいよ、何もしなくても。ご隠居さんとおいらはまぶなんだから」

きくの視線を断ち切るかのように太郎吉が口を挟んだ。

「なに言ってんだい。あちらは御旗本のご隠居さんだよ。無礼者ってお手打ちにあつても文句も言えないくらい偉い大家のお侍さんなんだよ」

そうはいかないとばかりにきくが声を荒げた。重兵衛長屋のどの家からも聞こえるような家族ならではの音量。これこそが、普段の生活が戻ってきたことを物語っているかのようだ。

「おまえの得意のうどんでも打って持っていったら」

「そうだね。さつそく今夜打って、一晚ねかせりや良  
い腰のうどんなになるね。粉の買い置きもあるしね」

「ところで太郎吉。明日からおれの仕事場でしばらく  
見習いをしないか？ そろそろ将来のことも見据えな  
いとな」

「わかった。でもしじみ売りはこれからも続けるよ」

「好きにするさ」

せん太には、太郎吉が宮大工にはならないとわかっ  
てはいたが、今は自分の目の届く範囲においておきた  
かった。一時はどうなるのかと、長屋の誰もが心配し  
たが喜左衛門の尽力により、いつもの生活に戻ったこ  
とに一番安堵したのはせん太だったのかもしれない。

翌日から太郎吉はしじみを売り終えると長屋に帰り  
朝餉を掛けこむと早々にせん太の仕事場に走った。日  
が落ちる少し前には小川に行き、しじみを獲って長屋  
へと帰る日が続いた。

太郎吉は、普請場での下働きの合間に知識を得よう  
と多くの職人に親しげに話しかけた。柱の立てかた、  
壁下地の造り方。下塗り中塗り、仕上げ塗りに漆喰。  
瓦の葺き方など興味深げに耳を傾けた。

「太郎吉は親父より早く棟梁にでもなるつもりか？」  
職人の誰もが太郎吉のどんぐり油の一件を知ってい

た。感心もし、同情も寄せた。太郎吉を揶揄すること  
もなく、若くして棟梁だって夢ではないと感じていた。

敵しさを虐げられている多くの孤児。一人でも多く、  
世間の風に負けることなく独り立ちができるまで手助  
けをしてやりたいと願う静蓮。せつかくのどんぐり油  
を取り上げた寺社奉行。命じたのは、油問屋の元締め  
から袖の下を積まれての目付役。太郎吉が考案した銃  
尾栓の道具は、元締めの作業場でより大きな銃尾栓と  
共にこれまでより効率よく油を搾りだしている。

「庵主さま、我慢ができません。あの油問屋は汚い手  
を使って御上を動かし、おいらが考案した道具を取り  
上げ、これまで以上に稼いでいる」

「太郎吉さん。そんなに悔しがるものではありません。  
阿弥陀様はきつとまた良い知恵を授けてくださいます。  
それを信じましょう」

「でも……。ちくしょう、あの油問屋の蔵から千両  
箱を盗んでやりたい。一泡吹かせてやりたい」

「太郎吉さん！」

静蓮は手で自身の膝を強く打ち、大きな音を本堂に  
響かせると同時に強い口調で太郎吉をたしなめた。

「あなたは、将来のある身。知恵も行動力も備わって  
いる。それを生かすことを考えなさい」



静蓮の胸の内には何かを秘めていた。仏に使える身とはいえ油問屋のやり方には業を煮やしていた。ましてや世を正すべき役目の目付までがそれに加担している。理不尽さの陰に泣く孤児たちの姿を哀れむことしかできない。そんな自分に対するいら立ちを隠しての太郎吉への叱責であった。

「それでも・・・。あいつらの金蔵の鍵前は破れなくても屋根なら簡単に破れる。瓦がどうやって組まれているかも知っています。舂が通る穴さえあればいい。問題はどうかやって屋根に登るかだ」

金蔵はほかの建屋と独立して建てられている。泥棒避けのため屋根から屋根へと移ることができないことへの策としてのことだ。

「いい加減にしなさい。太郎吉さん、そんなことを考えてはいけません。太郎吉さんは料理人をめざしたいのですよ。それだけを考えて日々を励むことです」

静蓮は太郎吉を諭しながらも「確かに錠前はむりでも屋根なら」と、脳裏をよぎった。

見世物小屋など行ったこともない太郎吉には軽業師の存在すら知らないことではあったが、軽業師だった静蓮には長縄とかぎ手さえあれば難なく蔵の屋根に登れることがわかっていた。

尼寺に出家する尼僧たちは、単に仏の道を究めたいと門をくぐるとは限らない。辛い過去や、さまざまなしがらみを断ち切つての出家もあった。前職もさまざまだった。浄光院の尼僧の一人、しんみょう眞妙の場合夫婦あし鷹として多くの普請場で足場組を手掛けていた。大屋敷ともなれば三階建も珍しくなく、蔵を見下ろすほどの足場組にも慣れていた。しかし眞妙も辛い過去を抱えて阿弥陀に手を合せていた。

幸せの絶頂期だった。だが、亭主と子供は大火に巻き込まれた。そして、まだ幼い一人息子をかばうように抱えた亭主ともども無残な姿でこの世を去った。視線はさまよい、舂も心も行き場を失っていたところを静蓮によって助けられたのだった。

身の軽い静蓮と眞妙がとつた行動は意外なものだった。油問屋の元締めと目付の土蔵の屋根を破つて千両を盗んだ。長縄を使つて静蓮が蔵の中に入る。眞妙は屋根の上に残った。静蓮が千両箱を開け、二重の布袋に五百両を入れた袋二つを眞妙に引き上げさせる。眞妙はそのあと静蓮を引き上げる。遠くで取り手の吹く呼子の音を背中に受けながらではあったが、どちらの蔵も難なく盗み取ることができた。このことは誰も知らない。太郎吉はもちろん他の尼僧たちにも覺られて

はいないと静蓮は思っていた。

「いてじゃないかー。こんちくしょ！」

まだ夜が明けきれてはいない。しじみを獲りに行く時間には少し早かもしれない。それでも太郎吉はしじみ獲りに使う道具を散らかし、闇夜に向かつて大声を上げた。声を聞きつけた捕り手たちが慌ててやってくる。

「黒い二人組の男が向こうに走っていきやがった」

役人に問われた太郎吉は、静蓮たちが向かった真反対を指し、いかにも痛そうに尻をさすった。

役人は、太郎吉の名前を問うこともなく指さした方へと走り再び呼子を鳴らし続けた。

「へっ、うまくいった」

太郎吉の顔が緩んだ。とっさの思いつきが成功したことさることもながら名前を聞かれなかったことに安堵したのだった。もつとも、聞かれれば次郎吉じろうきちと応えるつもりだったがその必要はなかった。

それから数日後、あの油問屋の蔵に泥棒が入ったとの話が世間を騒がせた。破られたのは蔵の錠前ではなく屋根の瓦をはがして蔵の中に入ったとのことだった。千両を盗んだらしい。

「千両ってことは盗賊は独りか？ 千両箱はもつとあ

つたろうに」

「さあ、わからん」

「土蔵の高さから蔵の中に降りるのは容易でも千両箱抱えて登るのは大変だろう」

「さあ、わからん」

「蔵の壁も屋根も分厚くて穴を空けるのも容易なことではなかったろうに・・・。どうやったんだろうな」

「さあ、わからん」

こんなやり取りが江戸中を駆け回った。ひと月ほどして今度は、目付役の蔵に泥棒が入ったと評判になった。どちらも要として下手人がわからず半年ほど忘れられた話題となった。

千両は静蓮の寝室の床下に埋め隠されている。ほとぼりが冷めたころ毎月初めに掘り出し、十両を半紙にくるんで浄明光院の正面の浄財箱の中に放り込むことでどんぐり油の代わりとすることにした。

浄明光院には百人を超す孤児たちの元気な声が響いている。二人一組のしじみ売りには二十人ほどの孤児が係わり、賄所で使う油のどんぐりや木の実は小さな子供たちまでが年上の子供たちとともに拾い集められた。油搾りは太郎吉の指図で行われ、振る舞い所の手伝いは十歳を超えると少しずつ仕込まれていった。寺

子屋での読み書きそろばんは年齢に関係なく子供たちの能力に合わせ、尼僧たちによつて近在の子供たちと同じように毎日少しづつ行われた。

「庵主さま、どうですか。浄財の集まりは？」

「太郎吉さんの助言で始めた精進料理の振る舞い。たいそう人氣で毎日大勢の人が」

寺社奉行のお調べのあつた数日後、太郎吉の発案で浄明光院と隣接して振る舞い所を建て、どんぐりだけにとどまらず、つばき、さざんか、を始めとしたさまざまな木の実から油を搾り、その油を使つてんぷらを揚げ、他の惣菜とともに振る舞い飯として訪れる信者に提供した。もつとも商いはできないので浄明光院のお札を購入していただいたお札としての昼餉の振る舞いであり酒が出ることはない。てんぷらの具材も山からの恵みもので子供たちの手によつて季節のものが振舞われた。

「庵主さま、庵主さま」

尼僧が興奮してるかのような赤ら顔で駆けて来た。裾が乱れているのを気にするでもなく息がきれている。

「どうしました。尼僧らしくもなくはしたない」

「表の賽銭箱の中にこれが・・・」

尼僧の差し出した手には小判が十枚、半紙に包まれ

ていた。盗賊の話が忘れ去られたころだった。

「どなたかは知りませんがありがたいことです」

そのほかにも浄明光院では寺子屋が毎日のように開かれ、孤児へはもちろんのこと町屋の子供たちにも読み書きそろばんが手習いとしておこなわれていた。親たちは決まった額ではなくともそれぞれの家の事情に見合った額を浄財として決まった日に納めていた。中には野菜を手にしてくる親もいたが静蓮はありがたく押し頂いていた。孤児たちは十五歳になると住み込みの奉公に出た。読み書きやそろばんができ、台所も手伝えるとの評判は奉公先を見つけるに困ることはない。大火が出るたびに増える孤児。切れ目なく浄明光院にやってくる孤児。それでも浄明光院の台所は潤っていた。さらに十両の浄財が毎月初めに賽銭箱に投げ込まれてくる。

「庵主さま、三十両を貸していただけませんか？ 父ちゃんに棟梁になつてもらいたいです」

小判が投げ込まれるようになって半年が過ぎ、太郎吉も十五歳になった。振る舞い所での太郎吉の修行も本腰を入れ始めていた。太郎吉は長屋を出て、振る舞い所に寝泊まりすることに決めていた。独り立ちのその前の晩、太郎吉は静蓮に借金を申し入れた。

「わかりました。返済はいつでもかまいません。今の浄明光院あるのは太郎吉さんのお力によるものです」

快い承諾を得た太郎吉は、前もって用意してあった絆纏とともにせん太の前に差し出した。

「父ちゃん、これで棟梁株を手に入れて」

三十両の大金ともなればせん太とて都合の付けられる額ではない。貯めるにしても容易なことではない。棟梁の夢をみながらきくと二人でコツコツと貯めてはいたがまだまだ先の長い話だった。

「どうしたんだ、子供のお前がこんな大金を」

「庵主さまに借りたんだ。今あるのは太郎吉さんのおかげだって」

「それにしたって・・・」

「棟梁になれば、稼ぎだって大きく違うだろ。そうすれば数年で返せるじゃないか。夢だったんだろう」

太郎吉は、風呂敷包みをほどこき、背中に棟梁、襟にせん太と染め抜いた絆纏を父親の背中に掛けた。「あんた、似合うよ」

きくが涙ながらに何度もうなずいている。

「太郎吉、ありがたく貰うよ。今、話の来ている仕事を棟梁として請け負えば一年半もすりや三十両を返せると思う。いや、返すだけじゃなく浄明光院の手間賃

仕事はおれが引き受ける。なーに銭なんかいらねえ。ばちがあたらー」

「ほんとだね。庵主さまには足を向けて寝られないね」「ところで太郎吉、おまえ本格的に宮大工の修行をしないか？」

「とうちゃん、悪いけどおいら宮大工にはならない。父ちゃんの跡はこう太に任せるよ。庵主さまの手助けをしたいと思います。弧児はこれからも増えるだろうし」

「そうか。しかし、今はいいが十五歳ともなれば浄明光院にいつまでも寝泊まりはできない。尼寺だからな。暮らし向きはどうする」

「振る舞い所に寝泊まりするさ。そこで調理を庵主さまや他の尼さまから仕込んでもらう。そしていつかもつと大きな茶屋を商つてみたいんだ」

「庵主さまの料理つて精進料理だろう？」

「そうだよ。でも庵主さまは出家する前までは茶屋の女将さんだったんだ。その前は軽業師。見世物小屋の看板だったらしい。板前だった旦那さんが無礼打ちにあつて身投げしようとしたときに浄明光院の前の庵主さまに助けられたらしいよ」

「太郎吉、おまえ詳しいね」

「まあね」

「しかし、振る舞い所で修行しても茶屋を開くほどの資金は賄えないだろう？」

「心配ないよ。その時がきたら庵主さまが用立ててくださることになっている。それに魚のさばき方も教えたださることになるし」

「日々のしじみと振る舞い所の上がりには、よほど浄明光院を潤しているとみえる」

せん太の顔は、感心しきっているかのようだ。

「そうさ」

一方の太郎吉の頭の中には、いとも身軽に屋根の上を飛び交う黒装束の老女の姿が浮かんでいた。

しじみ、振る舞い所、寺子屋によつて得られる浄財に加えた十両の全てが子供たちのために使われた。読み書きとそろばんができ、行儀作法も教えられているとの評判は大店からの引きもよく、十五歳になるとともに巣立って行った。また、巣立ちの前夜は赤飯を炊き、静蓮が門出を祝った。その際には必ず真新しい着物と身の回りのこまごまとしたものを揃え、浄明光院と小さく染め抜かれた辛子色の風呂敷に包み持たせていた。

翌日、新たに三人の孤児が浄明光院に引き取られた。

さらに、五年ほどが過ぎると、江戸の町にねずみが

出て長屋に小判を投げ入れて廻っているとの話でもちきりになった。

完

この物語はフィクションであり史実とはなんら関係はありません。